

初期韓国プロテスタントの誕生と成長： 東アジアキリスト教ネットワークの意味

副題：初期韓国キリスト教の誕生と成長に及ぼした
中国と日本のキリスト教の影響)

—
イ・ジェグン

● 韓国プロテスタントの始まり

中国(1807、ロバート・モリソン) / 日本(1859、ジョン・リギンズ(5月) アメリカ人6名を含む) / 韓国(1884、ホレイス・アレン、1885、ホレイス・アンダーウッド、ヘンリー・アペンゼラー等)、中国より80年、日本より30年遅れたプロテスタント宣教の開始にも関わらず、韓国で宣教師たちは、韓国がフィリピンに次ぎ東洋で二番目にキリスト教国家になる国であると期待。

キーワード：「後発走者」及び「学習効果」、すなわち、中国と日本の宣教の歴史を見本にし、試行錯誤の最小化+すでに中国と日本で成されているものを韓国の状況にすばやく移植。

● 初期韓国教会の急成長の原因及び中国/日本との関連性

① 国の運命が絶体絶命に瀕しているということのゆえに、キリスト教を代案として受容した人が多かった。(1876 江(こう)華(か)島(とう)条約、1882 壬(じん)午(ご)事変(じへん)及び済物(さいぶつ)浦(ほ)条約、1884 甲(こう)申(しん)政変、1894 東学運動/甲(こう)午(ご)改革/日清戦争、1895 乙(いつ)未事変(びじへん)、1896 露(ろ)館播遷(かんはせん)、1904 日露戦争、1905 乙巳條(いっしじょう)約(やく)) cf. 中国/日本も似た現状があったが、韓国とは違って抵抗が強かった。

スタント文明の絶対化、1919

3.1運動。当時の全体参加者の17-22%[約20%、女性は65.6%]がキリスト者、しかし当時の人口中クリスチャン比率は1.5%)

⑦ 他国に類を見ない大リバイバルの大きな働きが起こった。(1900年代朝鮮半島の大リバイバル、日本はリバイバルの歴史がなく、中国は山東半島、満州地域など局地的)

⑧ 自立、自治、自伝を速い時間内に可能とさせたある宣教政策が初期から施行された。

(ネヴィウス宣教政策の採択、リバイバル集会の定着、大リバイバル以後自伝、自治をする韓国プロテスタント教会が固着、1907年の重要性[平壤大リバイバル - 長老派独老会と7人の最初の牧師；ネヴィウスは中国山東の宣教師として中国では成功しなかったモデルが韓国では成功])

これらすべての要素が各々十分に韓国教会のリバイバルの妥当な理由であると言えるが、実際はこの中のどれか一つだけではなく、すべての要因が旧韓末(朝鮮末期から大韓帝国までの時期)と日帝時代(日本統治の時代)という時空間の背景で複合的に作用し、韓国教会が急成長したと言うべきであろう。しかしその背景に同じ東アジアの儒教、漢字文化圏にプロテスタントがすでに伝播された状態で多様な試行錯誤の過程を示してくれた中国と日本の事例が模範または反面教師の役割を果たした。したがって韓国プロテスタントの誕生と成長ははじめから東アジア文化ネットワークの一部であり、このようなネットワークと相互共存の価値は21世紀東アジアキリスト教の未来のために省察し、摘要すべき重要要素である。